

**SC-50 危険な魅力**

“Fatal attraction”

by Lary Faris

抄訳 薩川俊三

1点勝ちと100点勝ちは、勝利の価値は同じだが、プレーヤーはしばしば必要以上に得点をリードして勝とうとする。この「リード欲」のプレーを失敗して負けることがある。必要でないのに、相手ディスクをキッチンに入れようとする「危険な魅力」のプレーをして、負けた3つの例を紹介する。

図は全米ダブルス選手権の決勝のコートのフットの状況だ。

75ポイントゲームの第3ゲームで、イエローが53点、ブラックが67点だ。イエロー組は、このフレームでハンマーを持っている。ブラック組は次にハンマーを2つ持つので、試合に勝つチャンスだ。ブラックはイエロー7を突き出す必要があり、出来れば彼の7を置き換えて隠そうとしていた。ブラックは必要でないのにイエロー7を10オフに入れたくなった。それは「危険な魅力」だった。ブラックはイエロー7に当て意図したように置き換えたが、10オフに入れようとしたので弱くシュートし過ぎて、イエローを7に残した。イエローはハンマーを4番からシュートして、7/8ライナーをダブルにして22得点し、75対74で勝った。

1989年にフロリダ州クリアウオーターで行われた国際大会で、イエローの米国のハーブ・ハローウェイが、フレームゲームの2フレームを残して14点リードされていた。ハーブは第15フレームで、フレームの彼の第7ショットを8/8ライン近くに置いた。相手がハンマーを置き換えた時、8/8ラインに触れることを望んだのだ。相手はそれを10オフに入れたくなった。これは「危険な魅力」だった。彼のハンマーはハーブの8と置き換わり、8/8ラインに触れた。しかも、彼は弱くシュートし過ぎて、ハーブのディスクを7に残したので、相手のリードは7点になった。ハーブは次の最終フレームでハンマーを8に得点して試合に勝った。

同じ国際大会で、日本の曾我部靖子が最終フレームをプレー中で、勝つためには、8点が必要だった。相手がフレームの第7ショットをする時、ボード上には曾我部の7があり、相手が7を置き換えると、曾我部は勝つにはそのディスクをキッチンに入れなければならない、成功の見込みは僅かだった。相手は曾我部をもっと難しくさせようとして、7を置き換えながら、7をキッチンに入れようとした。「危険な魅力」だった。相手のシュートが少し強過ぎて、曾我部の7を10オフのバックライン上に残した。曾我部はハンマーで、このバックストップを利用して相手の7をキッチンに入れて勝った。

